

わたしたちの古い文学の歴史の資料

「あるいは、初期ヒンディー文学の歴史を知るための資料」

ハザーリープラサード・ドウヴィヴェーデー

坂田 貞二 訳・解説

凡例

「」内は、訳者による読み下しの補足。

() 内は、原文の用語・術語の訳者による言いかえ、または

原文に示された典拠。

ヒンディー文学の歴史は、偶然と幸運で得られた文献「だけ」で書くわけにゆきません。ヒンディー文学はすべて、民の言葉の文学です。ヒンディー文学の歴史を書くには、偶然に得られた文献だけでは十分ではありません。文献に書かれたことによって私たちは、社会のある思潮を知ることができます。けれどその思潮の周囲にあつて影響を及ぼした思潮や慣習が、文字に書かれなかったことがあります。文字に書かれても今日に伝わっていないものもありましょう。カビールダースの『宗教詩』『ビージャク』の写本は、ブンデールカンドからジャーラカンド、そしてビハールを経てダナウティーの僧院に長いあいだ放置されていました。それが刊行されたのはずっとあとのこと。そのなかの「物語性をもつ詩篇」「ラマイニー」の章から、当時ニランジャン(シヴァ神)またはダルムラージ(正義神、ヤマ閻魔)を主に尊崇する信仰が行われていたらしいと推測されます。これは、オリッサ北部とジャーラカンドで得られた文献、その地の人々の伝承によつて裏付けられます。ベンガル西部とビハール東部では、ダルム・タークル派の伝統がいまなお生きています。この現存する宗派と忘れられているオリッサの宗派の研究によつて、『ビージャク』から窺い知ることのできる信仰がわかってきます。カビールダースの『ビージャク』は、のちに沢山の詠歌が挿入されたために元の古い写本が伝わっていませんが、民間のある集団の思潮の研究の一助になります。カビールの『ビージャク』は、その作品だけにとどまらず、周囲の人たちの歴史をも物語っているのです。

インド社会はずっと、今日あるようなさまであり続けてきたわけではありません。この広大な地に、さまざまな人種・民族がつつぎつつぎに入ってきて、それぞれの思想と慣習によつて影響を及ぼしてきています。ですから今日の社会制度は、決して古来のままではあり

ません。今日の社会で下層に位置づけられるジャーティ（カースト）が、ずっとそうであったと理解すべき理由はまったくありません。同様に、社会の上層に位置づけられている諸ジャーティも、いろいろな状況を経てそこに辿りついたのです。さまざまな人たちが形成するわたしたちの巨大な社会は、変化が比較的に少ないものですが、その社会を上から下まで揺さぶる運動がなかったわけではありません。今日では権威を持っているバラモン教を、かなり多くの人が認めていなかった時代もあるのです。その人たちは、古くから独自の伝承と社会制度、独自の死生観を持っていました。ムスリムがインドに入ってくるまでこの人たちは、ヒンドゥー教徒と言われていませんでした。あるとき、わたしたちの社会に一つの強力な圧力が加わりました。それでわたしたちの社会は、二つの巨大なキャンプ（陣営）に分割されることになりました、ヒンドゥー陣営とムスリム（回教徒）陣営です。

ゴラクナート師が創めたとされる宗派は、そのころ十二ありました。それには、その前からあった仏教、ジャイナ教、シヴァ神信仰、シャクティ信仰の諸派が組みこまれていました。しかし「当時の宗教的な力から」遠く離れて暮らしていた宗派の人たちは、ムスリムになりました。ヒンディー文学の種々の書物によって、その社会的な圧力のさまが察せられます。それを証明する歴史的な証拠はほかにありませんが、結果から推して、ムスリムがこの国に来たときに誰もが大きな陣営のどちらかに寄辺を求めねばならなくなったと考えざるをえません。パンジャーブ北部からベンガルのダカ地方にいたる半月形の広大な地域に住んでいたジュラーハー（織工）のことを研究した「イギリスの人類学者」リズレーは、ジュラーハーたちがあるとき集団的にイスラム教を受け入れることになったと推察しています。最近の研究によって、この推察が検証されました。ジュラーハーたちはじつは、ヒンドゥー教徒でもムスリムでもない、ヨーギー（ゴラクナートの教えに依拠する苦行者）の弟子だったのです。

文学の歴史は、文献、作者・詩人の出生と活躍の歴史を書くだけでは不十分です。文学の歴史は、古代から息づいてきている人間が、社会でどのように生きてきたかを語るものであるべきです。文献と筆者、詩と詩人、宗派とその師などは、その力強い生命の流れの一部を覗かせるにすぎません。そういうものは、文学の中心ではありません。中心は、人間です。さまざまな状況のなかでわたしたち人間の心のなかにありつづける生命―これを知ろうとしてわたしたちは、文学の歴史を研究するのです。

七・八世紀から一三・四世紀にいたるあいだに民衆の言葉で文学が生まれていましたが、

その多くがこれまで見過ごされてきました。人々の目がそれに及ばなかったのです。その数世紀の民間文学だけでなく、文学的・文化的な源流たる膨大な学問文献も、無視されてきました。カーシュミールのシヴァ派文献、ヴィシュヌ派の膨大な聖典、パーシユパト・シヴァ（獣主シヴァ）派の文献、タントラ（呪法）文献、ジャイナ教徒と仏教徒によるアパブランシヤ語（古典インド語から近代インド諸語への転換期の地方語）の文献は、そのころようやく成りたちはじめていました。シュレーダー（Otto F. Schrader）の懸命な研究のおかげで、これらの広範な文献のことが研究者に知られるようになり、以後のインドの文献・文学の研究を導くことになりました。

ヒンディー文学を研究するには、まずつぎの八つの分野の文献を調べることが有益だとわたしは思います。そういう知識がなくては、「ヒンディー文学の中核をなす一六世紀からの」帰依信仰文学も、「一二世紀ころからの」英雄伝文学も、「一七世紀からの」作詩法文学も理解できないでしょう。

ここに八つの分野の文献を列挙します。

- 一． ジャイナ教と仏教のアパブランシヤ語による文献。
- 二． カーシュミールのシヴァ派および南と東のタントラ行者の文献。
- 三． 北と北西のナート派の文献。
- 四． ヴィシュヌ派の聖典。
- 五． プラーナ（神話・伝承などの古譚）。
- 六． ニバンド・グランタ（綱要書）。
- 七． 東部「インド」で埋もれている仏教とヴィシュヌ派「の接点」の文献。
- 八． 民間のさまざまな語りの記録。

アパブランシヤ語によるジャイナ教の膨大な文献は、まだあまり公刊されていません。これまで出版されたものだけでも、ヒンディー文学の歴史を知るうえで貴重です。ジョウインドあるいはジョーギンドラやラームスインプの二行詩を読んだなら人はおわかりでしょう——仏教徒・ジャイナ教徒・シヴァ神を信仰するナート派の人たちはみな、十世紀よりだいぶまえに旧習への批判と内観・自省による修行の萌芽を持っていました。アパブランシヤ語による仏教文献も、同じことを示しています。ヨーガ重視、内省的な修行、至高の追求などはみな、自己の体内で実現されるとの教えが、国中に広まっていた修練の中核でした。こういう思潮が、のちにさまざまなニルグナ（形象のない神を尊崇する）宗派に違った形で場を得るようになりました。これらの文献が手助けしてくれるのは、ニルグナ

派の文学にとどまりません。これらの文献によって、詩の形の展開や民間の思潮のさまもわかってきます。「ヒンディー文学の生成期を研究する」ラーフル・サーンクリティヤーヤン(二八九三―一九六三)のような大家が、「文人」スワヤンブーの『ラーマヤーナ』をヒンディー語による最も優れた詩だと言っています。それはヒンディー語ではなく、そのまえの段階のアプブランシャ語による詩ですが、それを読まない人は詩の情趣を知らないまま過ごすことになりました。これらの文献は、作詩法時代の文学を研究するうえでも有効でしょう。

カーシュミールのシヴァ派の文献は、ヒンディー文学に間接的に影響を及ぼしました。それらは、ジャグディーシュ・バナルジーやムクンドラム・シャーストリールらによって光が当てられましたが、まだ学者たちの関心が十分に行きとどいていないとは言えません。ヒンディー語ではバルデーヴ・ウパーディヤーエがそれとタントラ(後期密教聖典)の哲学について簡単な紹介をしていますが、この分野についてはもっと多くの本が出版されるべきです。驚くべきことに、北インドの不二元論と南インドの『パラシュラーマ・カルパ・スートラ』の教義がじつに似ています。修行のなかに流れる想いは、地域や時代による断を認めないものようです。

ヒンディー語では、ゴラーク派の文献はごく少ししかわかっていません。マツエーンドラナートは、中世の多くの派が師と仰ぐ変革期の思想家です。ヒンディー語の文献でその方の名は、マチャンドラとなつています。後世のサンスクリット語文献では、純正化してマツエーンドラとしていますが、多くの行者はマツエーンドラよりマチャンドラを採っています。行者チャンドラナートのように教養のある改革者は、「無学な人の」この受けとめかたを好みません(著書の『ヨーギサンプラダーヤーヴィシシュクリティ』四四八―九ページ)。

けれど最近の研究で、マチャンドラの名がかなり古く、これがおそらくその師の正しい名であろうとわかりました。マツエーンドラナート(マチャンドラ)が著した本が多数、ネパールの王室図書館に残っています。なかの一冊に『カウル・ジュニヤーニヤ・ニルナヤ』があります。それを精査した碩学の故ハルプラサード・シャーストリは、それが九世紀に成ったと推測しています(ネパールの王室図書館蔵書目録二巻の一九ページ)。最近、プラボードチャンドラ・バークチ博士がその本をマツエーンドラナートのほかの本(『アクル・ヴィールタントラ』『クラナンド』『ジュニヤーン・カーリカー』)とともに編んで出版されました。その刊行物の序文には、マチャグヌ、マチャンドなどの名が見られます。注目すべきは、シヴァ派の思想家に詳しい「十世紀の」アピナワグプタ師もマチャンドの名

を採り、それが象徴的な名だとして解説していることです。その解説によってこれまで混乱していたことから脱却して、マチャンドの名が確認されました(『タントラローク』二五ページ)。『ヤントラローク』の注釈者ジャエドラトも類似の詩句を引用して、マツチュが不安な心のさまを表す語だと説明しています。その不安なさまを打破した師が、マチャンド(不安の打開者)なのです。カビールダースの宗派では今日も、マツツやマツチュという語の象徴的な意味が「心、思考」とされています(参照Ⅱカビールの『ビージャク』のヴィチャールダースによる注、四〇ページ)。こう理解する伝統は、アピナワグプタ師に遡ります。そのまえにこのような理解がなかったという証拠はありません。仏教修行者の古い讃歌から、プラジュニヤー(理知)こそがマツツヤ(不安)なのだとわかります(『王立アジア協会ベンガル支部会報』二六卷一、一九三〇年刊、所収のトウツチ論文)。こうして、マツエーンドラナート師は存命中に、象徴的にマチャンド(不安の打開者)と言われていると考へても誤りではないでしょう。こういう些細なことを検証するなかから、当時の宗教信仰がいかに内観的であったかがわかります。

まことに残念ながら、バクティ(帰依信仰)文学の研究はいまだに深まっていません。サグヌ(属性を認め、神が人格を備えて顕現するとの信仰)、ニルグヌ(属性がなく、神は姿・形をもたない最高我だとの信仰)の両方の潮流を研究してはじめて中世の人を理解できます。バグヴァト・プレーム(神への敬愛・信愛)が、中世に息づいていた最大の推進力でした。この神への敬愛・信愛は、感官で捉えられるものではありません。心と理知をも超えたものとされています。それを感得するには、行為するほかありません。理知はそこまで届きませんが、それをなんとか感得しようとの努力がなされてきました。そのためになすべきことの詳細な指針が示されました。それを実践すれば、神がもたらす甘露を喫することが可能になります。この種のアーガマ(聖典)はまだ、ごく少しか刊行されていません。トゥルスイーダースが「二五七四年に着手したとされる」『ラーム・チャリト・マーナス(ラーマの行いの湖)』を基盤として、帰依信仰研究の文献が多数著されましたが、それらもあまり論じられていません。こういうことを十分に検討してはじめて、中世の人のことがよくわかってくるのです。

タントラ(後期密教)の修行について、ヒンディー文学の史書は黙して語りません。ですがナート道の研究者は、それについての文献と修行が盛行していたことを知っています。カビールの影響を受けたニルグナ諸派に、古密教で「牛乳・蜜蜂・砂糖などを混ぜた神饌」パンチャームリト、パンチュパヴィトラ、チャトウシュチャンドラを捧げる修行法が継承

されているのですが、このことを知る人は多くありません。これは本題から外れますので詳しく述べませんが、この種の文献を通じて人間を知るためにわたしたちがなすべきことがまだ残っています。

カビールダースの『ビージャク』のなかに、「バラモンと」ヴィシュヌ派の化身ラーマやクリシュナを信奉する「ヴィシュヌ派信徒は、「たがいに反目しているが、真の神を感得していない点で」同じなるとわれ知りたり」（十二番句）とあります。この句から、バラモンとヴィシュヌ派が対立していたことがわかります。この言をわたしは奇妙だと思いました。『ビージャク』の研究を進めるうちに、『ビージャク』のある部分はビハールの東部と南部の信仰の影響を受けていると確信するようになりました。そして、当時のその地域に有力なバウド・ヴァイシュナヴァ・サンプラダーエ（仏教とヴィシュヌ派が混交した信仰を持つ宗派）があつて、かれらにバラモンが敬意を表していなかったと思うにいたつたのです。ナゲンドラナート・バス氏はオリッサの五人のヴィシュヌ派詩人の作品を研究した結果、「その地の」ヴィシュヌ派の詩人というのは、じつは中道派の仏教徒だったのだが、バラモン支配体制の圧力下でヴィシュヌ派と称していたとの結論に達しました。わたしはこういうさまを、新著『カビール派の文献』（一九四二年に刊行されたときの題は『カビール』）で詳しく検証しました。ここで申したいのは、ヒンディー文学の資料を研究することによって、人間の埋もれ眠っている思考・思索のさまを知りうるということです。文学の歴史は、文献の成立年代の検証にとどまってはなりません。人間の社会はじつに複雑です。文学の研究は、人間の心が錯綜しているさまを解きほぐしてください。

それにあたってなによりも大事なものは、さまざまな民族・宗派と一般民衆に伝わる伝承です。それによってわたしたちは、歴史のなかで忘れさられたことを知るだけでなく、中世の文学を知る途をたどれます。オリッサ、ジャールカンドおよび中部インドの東部で民間に伝わる伝承・慣習は、人間の心の錯綜を解きほぐし、深淵で難解なカビール派の教えを理解する援けになりましょう。このことにより多くの注意が払われるべきでしょう。また、統計や民族学の雑多な資料も十分とは言えません。それらも、わたしたちの文学を理解するうえで有効です。こういうさまざまながらを参酌しなければ、わたしたちの文学研究は成就しません。

解説（原題・出典、本文の趣旨・邦訳の文体、参考文献）

（注記） *hinDeyi* ヒンデイー語をローマ字に転写するには、Kyoto-

Harvard 方式により、長母音、反り舌音を大文字で、鼻音化音

をMで、そして硬口蓋歯茎摩擦音(日本語のシユ)をzで記した。

原題・出典

この文の原題は、*hamAre purAne sAhitya ke itihAs KI sAmgrI*である。初出は、本文と筆者の諸著作から推して一九四二年ころであろう。原題を直訳すると、「わたしたちの古い文学の歴史の資料」となるが、文意を汲むと「初期ヒンデイー文学の歴史を知るための資料」となる。

この短い示唆に富む文は、小論文集 *azok ke phUI* (『無憂樹の花』) に掲載されている。今回テキストとしたのは、一九六六年刊の第八刷、九〇—九七ページである。

本文の趣旨・邦訳の文体

この文章で筆者ドウヴィヴェーデーが訴えようとすることは、第四段落につきのように端的に示されている。

文学の歴史は、文献、作者・詩人の出生と活躍の歴史を書くだけでは不十分です。文学の歴史は、古代から息づいてきている人間が、社会でどのように生きてきたかを語るものであるべきです。文献と筆者、詩と詩人、宗派とその師などは、その力強い生命の流れの一部を覗かせるにすぎません。そういうものは、文学の中心ではありません。中心は、人間です。さまざまな状況のなかでわたしたち人間の心のなかにあります。つづける生命—これを知ろうとしてわたしたちは、文学の歴史を研究するのです。

筆者のこの考えは、文学史を理解するための資料について述べる冒頭の四つの文を承けている。煩を厭わず再掲しよう。

ヒンデイー文学の歴史は、偶然と幸運で得られた文献「だけ」で書くわけにゆきません。ヒンデイー文学はすべて、民の言葉の文学です。ヒンデイー文学の歴史を書くには、偶然に得られた文献だけでは十分ではありません。文献に書かれたことよって私たちは、社会のある思潮を知ることができます。けれどその思潮の周囲にあつて影響を及ぼした思潮や慣習が、文字に書かれなかったことがありましようし、文字に書かれても今日に

伝わっていないものもありましょう。

ドゥヴィヴェーデーはこのような自戒に基づき、文学の中心課題は人間そのものだと主張を、十五世紀の織物職人カビールが宗教詩を詠った宗教詩『ビージャク』を主な事例として展開する。

筆者の「文学の中心は人間だ」とする考えは、人本主義に基づいている。そのことを二一ページにわたって説いた論文が、『無憂樹の花』に“manuSay hi sAhitya ka lakSay hai”（「人間の暮らしを向上させること」こそが文学の目標）の題で掲載されている。

そこでドゥヴィヴェーデーが説いているのは、およそつぎのようである。

自分たちがいま文学を創造し研究しようしている社会は、ジャーティ（カースト）差別の温床になっている（一七〇ページ）。

ヒンドゥー教徒と回教徒の対立、バラモンと賤民の差別、富者と貧者の落差が自分たちをとりまいている。しかしながら、差別・対立は表面的なものであって、深奥を見れば人間はみな同じである。文学は「人間みな同じ」ということを伝え、だれもが人間らしい暮らしができるよう途を求めるものだ（一八八ページ）。

訳出した論文とここに要約を掲げた論文を総合して察するに、ドゥヴィヴェーデーは、人間の暮らしを向上させるのが文学の目標であり、文学とその歴史により人間の全容を知るためには教派の教えや文献だけでなく、民間の慣習・伝承も視野に置くべきだ、という考えであろう。

筆者ドゥヴィヴェーデーはバナーラスで学び、若くして注目され、詩人タゴールが開いた大学で教育・研究をした。ここでは、教える者と学ぶ者が同じキャンパスに住み、ゆったりと語りあうなかで暮らしていた。ドゥヴィヴェーデーがその学園でタゴールと密に接しながら考えを展開させていったさまは、かれのエッセイから窺い知れる。ドゥヴィヴェーデーの人本主義はおそらく、自身の持ち味とタゴールとの対話によって培われたのである。訳出論文、要約論文とともに、タゴールの学園で書かれたものである。

ドゥヴィヴェーデーは、一九五〇年に古巣のバナーラスのバナーラス・ヒンドゥー大学の教授となり、多くの弟子を育てた。そして一九六〇年にパンジャーブ大学に招かれた。そこに赴任後もドゥヴィヴェーデーは、自宅のあるバナーラスに戻ると大学で講演することがあった。

バナールス留学中の訳者（坂田）が何回か聴いたかれの講演は、講演というより、ゆったりした口調で自問自答しながら考察を進めるものであった。そのとき、かれのエッセイや小論文はそういう自問自答の記録らしいと気づいた。ここに掲げた文もその一例と解せられるので、筆者の語りの口調を想いだしながら、「です」「ます」調で翻訳してみた。

参考文献

ここに訳出した文章は、じつはその二年ほどまえにドウヴィヴェーデーが公刊したつぎの著作の要約・展開となっている。

dvivedi, hazārIprasAd, hindi sahitya ki bhUmika, bambal, 1940. 直訳するよ『カンデー文学史序説』となるこの書には、邦訳がある。すなわち、

H・ドウヴィヴェーデー（坂田貞二・宮元啓一・橋本泰元訳）『インド・大地の讃歌―中世民衆文化とヒンディー文学』春秋社、一九九二である。

邦訳は、諸般の事情から原著の「付録」を省いた、本文のみのものである。

この二三〇ページほどの原著（その付録を除く邦訳は三〇〇ページほど）でドウヴィヴェーデーは、ヒンディー文学の始原からこの書の刊行直前までを見渡している。その理解と記述の方法はここに訳出した文と同じく、文学の中心課題は人間の心を描くことにあり、埋もれている伝承や見過されている文献をも視野に入れて研究することによりその歴史が理解できようというものである。

ドウヴィヴェーデーはここに訳出した文の中ごろで、「ヒンディー文学を研究するには、まずつぎの八つの分野の文献を調べることが有益だとわたしは思います。それを列挙すると、ジャイナ教と仏教のアパランシャ語による文献、カーシュミールのシヴァ派および南と東のタントラ行者の文献等です」と述べている。『序説』の、邦訳では省かざるを得なかった「付録」で、ドウヴィヴェーデーはそれらについて基本的な情報を提供している。ゆつたりと語るような雰囲気で、一見なにげないことを記しているようなエッセイにも、この例に見られるように周到な準備と研究の背景がある。

さて、本文で主要な事例として言及されているカビールの作品とかれの生涯については、つぎの書が読者の手引きとなろう。

カビール（橋本泰元 訳注）『宗教詩 ビージャクイーインド中世民衆思想の精髓』（平凡社東洋文庫、二〇〇二）。この書は、翻訳・訳注と解説から成る。

その翻訳・訳注でカビールの声が窺われ、解説の「カビール思想の歴史的背景」で、

ここで言及されたことのうちカビールの時代の諸々の思想状況について、詳細な情報が得られる。